



巻頭言

日本農業のために今、自分に何ができるか

三共株式会社 取締役 農学博士 石田三雄

去る2月、ある会合で今焦点の羽田孜氏の話を聞く機会がありました。昼食をしながらの雑談で「日本は確かに世界の中で何ができるのかをはっきりさせなければ、仲間はずれになってしまう。コメの自由化は、そういう観点から判断しなければならない。しかし、私の故郷の近くの姨捨山のあたりでは、“田毎の月”といってミノやカサで覆い隠せるような田圃が幾つもある。その一枚一枚に十五夜の月が写るような風景があります。こういう田圃が（果している役割が）無くなるのはやはり問題ですねえ。お金を払ってでも耕し続けていただかなくてはなりません」という主旨の事を話しておられました。正に今我々が抱えている苦悩―「価格競争」と「国土保全」を言い表している言葉であり、見事なテラス田に緑と柔かい光を反射する水面を見る度に、心が和むと同時に此の言葉を思い出します。

今、日本の農業はゆらいでいます。これを一つの方向にまとめあげてゆくのは、何も農水省の新政策だけではありません。生産者、消費者は勿論のこと、関係する人々皆んなのコンセンサスとそれを可能にする技術開発が必要です。焦点はやはり稲作でしょう。とりわけ今望まれているのは、1つは一部のきつい肉体労働を除いて60才以上の高令者でも“手軽にできる稲作”と、もう1つは収入の基盤となる野菜・果樹農業との組合せでの“時間の掛らない稲作”，この2つです。その中でも農業散布―あらゆる農作業の中で最も嫌われる作業―を、精神的、肉体的両面において、いかに苦痛の無いものにするか、その技術開発は平凡な様でありながら、実際には大きな効果をもたらすものだと思います。

す。

現在、植調協会が中心になって推進されているいわゆるジャンボ剤（投げ込み剤）の開発は、まさしくこの技術の1つで、その特長を私なりにまとめてみますと次の様になります。

- ◎ 必要なところだけに………防除しようと思う田圃だけに、よそ様のところに飛んでゆく心配なしにまける。
- ◎ 必要な時に………農試や普及員が教えてくれる日（びたり適期）に、たとえ雨が降っていても傘をさしてまける。
- ◎ 必要な量だけ………面積に丁度合うだけの袋数を、ドリフトや薬がこぼれることもなく。
- ◎ 苦痛なしに………炎天下、二人でパイプダスターを持って、頬かぶりとマスクをし、防御服を着て、あるいは長靴をはいて田圃の中を歩いて、雨が降ってきたら途中でやめて帰る、そういうこともなく、一人でまける。
- ◎ 安全に………薬剤に全く接触せずに、子供にも手伝ってもらえて、隣りの畑にかかって薬害を起すことも、魚や蚕のことも心配せずにまける。

この技術がジャンボ除草剤だけでなく、殺虫殺菌剤すべてに確立すれば、デカプリングが世界の共通認識となる中山間地に、持続可能な農業を残せるばかりでなく、いろんな規模の稲作にも他の技術（例えば直播）との組合せにおいて大いに利用される可能性があり、日本の将来の農業に貢献できると考えて、1日も早く商品市場に送り出すべく努力を続けています。